

## 小塩和人著 『アメリカ環境史』

(上智大学出版、2014年)

信 岡 朝 子

「上智大学アメリカ・カナダ研究叢書」の第1冊目として刊行された本書は、その簡潔な書名に示されるように、16世紀から21世紀の北米大陸という「便宜的」(245)<sup>1)</sup>に区切られた時間および空間の中で、自然環境と人間社会がどのような相互関係を築いてきたのかという過程を、民族やジェンダー、階級といった人間社会の多様性にも目配りしつつ、包括的に描き出そうとする試みである。著者である小塩和人氏は、前著『水の環境史——南カリフォルニアの二〇世紀』(玉川大学出版部、2003年)において、南カリフォルニアを事例に、アメリカの水政策の歴史的推移を子細にたどっている。その際、「人間が自然に働きかけた様子の方は良く描けているがその逆に関する記述がない」(255)との指摘を受け、その反省をもとに本書を執筆したと述べている。

そうした狙いに基づく本書が提示する「環境史」とは、果たしていかなる学問体系と言い表すことが出来るであろうか。1970年代以降という、比較的最近意識され始めた学問分野であることもあり、環境史の目的や方法論などに関して研究者間の共通理解が確立されているとは言い難い。こうした点を踏まえて著者は、現在の環境史がいかなる新しい視点を提示し得るのかという点を、近接する他分野との対比から説明している。

まず、ドナルド・ウースターの言葉を借りつつ、環境史は「環境主義史」とは異なるという見解が示される。すなわち環境主義史は、自然を人間による破壊からどのように保護すべきかという倫理的問題、あるいは、それにまつわる社会運動の歴史にしばしば言及する。それに対して環境史は、「特定の時代および場所における環境と人間社会の相互作用を検証する」(2)ことを目的とし、必ずしも倫理的問題や社会運動史にのみ深入りするものではない。その一方で、環境史の分野としての特質を別の角度から際立たせる意味で、著者は前述のウースターの定義に基づき、環境史と「生態史」との間に見られる対比も示す。この両者は、その主題と方法論において互いに似通った存在ではあるが、生態史研究が、複雑に変化し続ける生態系(ecosystem)の一部分として人間を捉えるのに対し、環境史は、環境と人間の思想や価値観、生活様式等との間に見られる「相互影響」により注目するとされる。すなわち生態史が、歴史を決定する一要因としての「土地」や生態的変動の影響の方を重視し、国民国家という空間的単位にはあまり重きを置かず、学際的、長期的視野に立つ傾向にあるのに対し、環境史は、生態史に比べてより最近の文明を扱い、思想史、科学史、自然史、社会運動史、政策史、経済史、社会史など、複数の人文社会学系を中心とする学問分野における成果を内包しつつ、文化史的視点や、国民国家・政治行政的な境界線をより考慮に入れる傾向を持つ。まとめると環境史とは、「生態系、生産、再

<sup>1)</sup> 以下本書からの引用については頁数のみ表記。

生産、思考の相互作用を検証する」学問ということになるのである(4-6)。

こうした観点から著者は、環境史が提供し得る視点を以下の4つの次元にまとめている。第1の次元は、自然それ自体に注目し、自然が人間に与える生物学的作用と歴史的事象との関係性を検証するものである。北アメリカ大陸における、ヨーロッパからもたらされた疾病や種子、雑草などが、西欧諸国による新大陸植民地化のプロセスにもたらした影響などがその例としてあげられる。第2の次元は、狩猟、採集、農業、工業など、生産・再生産に関わる経済システムの変遷への注目である。第3の次元は、ジェンダー研究の発想に基づく再生産をめぐる制度の諸問題、第4の次元は、宗教や自然観といった価値観の変遷の問題とされる。特にこの第4の次元については、思想史や概念史の領域においてすでに多くの研究蓄積がある。そして、これらの4つの諸次元が、特定の歴史的事象の中でいかなる相互作用を及ぼし合ってきたかを検証することこそが、環境史の一つの目的とされる(6-7)。

このように、主に本書序論での記述をもとにこれまで「環境史」の定義やその学問上の位置づけといった点についてかなり詳細にまとめてきた。その理由とは、『アメリカ環境史』と銘打たれた本書が、環境史という、既存の学問分野における研究蓄積に依拠しつつも、これまでとは違う新しい見解と方法論を提起するという学問分野としての特質を、本書の構成、あるいは記述の仕方自体によって、具体的に体现していると思われるからである。例えば著者の前著である『水の環境史』は、南カリフォルニアの水利政策の立案、実施、評価に携わった人々のオーラルヒストリー、地方自治体、州・連邦政府の公文書、新聞雑誌の報道記録などを資料として用いた、<sup>2)</sup> 実証性の強い歴史記述であった。それに対して本書は、北米大陸における環境史の変遷を、16世紀から21世紀という非常に長い時間的推移の中で、一次・二次資料双方を含めた、環境史研究に関わる基礎文献を章毎に示しつつ通史的に概観するという、入門書、概説書としての性格を強く持っている。ただし本書は、単なる入門書であることを超え、上記の「4つの諸次元」に基づく学際的視点を、章毎にテーマを変えることでバランスよく取り入れ、また最新の環境史研究における課題や問題点を随所で言及するなど、環境史という新しい学問体系に対する批判的眼差しを欠かさない。そうしたバランス感覚の優れた筆致により、入門から応用まで、幅広いニーズに対応し得る厚みのある内容となっているのである。

本書は、序章・終章および12の章から構成されている。序章においては、前述のように環境史なる学問の成り立ちや展開、その定義や現行の課題があげられる。とりわけ著者による、「環境史が提供する1つの重要課題とは「語り」の意味である」(8)との指摘は重要であろう。すなわち、環境史に限らず従来の歴史記述の多くが、進歩と衰退を対比させるような「語り」を採用し、人類の発展と墮落、あるいは「楽観的な物語とならんで悲劇的な失樂園」(8)の物語を繰り返し描き続けてきた。環境史においても、特にアメリカ西部史においては「経済開発か自然保護か」という二項対立的な見方が支配的であった点が歴史家リチャード・ホワイトの言及に基づいて示され、ゆえに、人間文明と原生自然を互いに相反するものとして位置付けない新たなアプローチが、今日の環境史において模索さ

<sup>2)</sup> 小塩和人『水の環境史——南カリフォルニアの二〇世紀』(玉川大学出版部、2003年)、2頁。

れつつあることが述べられる(9)。その意味では本書も、進歩と墮落、あるいは文明と自然の対立という従来の物語形式を乗り越えた、新しい歴史記述を模索する試みの一つであると言える。

続く第1章から実際の歴史記述に移っていくわけだが、第1章は、北米大陸の地理的条件の紹介に始まり、ヨーロッパ人による植民地化以前の、北米先住民の地域分布や、気候的条件に適応した自然利用の特徴などがあげられる。主に取り上げられるのは、南西部の先住プエブロ族と北東部のミクマク族であり、前者がスペイン人植民者に、後者がフランス人植民者にどのような影響を受けたかが示される。なお、本章を含め各章の冒頭でしばしば示されるように、本書に含まれる章の多くが、環境史家キャロリン・マーチャント(Carolyn Merchant)の著書<sup>3)</sup>を参照していることを付け加えておく。

続く第2章では、スペインやフランスから約半世紀遅れて植民地化に着手したイギリスが、その農業経営によって人間と環境にもたらした影響が述べられる。主に17~18世紀のチェサピーク湾域でのタバコ栽培を例に、南部の降雨量や土地の肥沃さ等の自然条件が、現地のタバコ産業の発展、ひいては南部の奴隷制度の形成にもたらした影響等が記される。

第3章以降の主要な舞台は、アメリカ東北部ニューイングランド地方である。まず第3章で、ニューイングランドの森林地帯における北米先住民の生態系管理、およびヨーロッパからの植民者が森林地帯にもたらした影響が、経済史・思想史的観点を変えて考察される。第4章は、18世紀の北米沿岸都市部を中心に確立された輸出・自給自足併存型経済が、19世紀の全国市場型経済へと移行する過程を目撃した文筆家、哲学者、文芸家らによる、当時の経済発展、および自然や文明についての認識や知覚を描写するものである。こうした文化史的視点は続く第5章でも強く意識され、18世紀末から19世紀半ばにかけての社会機構の変動の中で、博物学者パートラムを始め、コールリジやワーズワース、ゲーテらの影響を受けたH・D・ソローの著作、自然の「商品化」という概念を思索したエマソンの論考、あるいはハドソン・リヴァー派という画家一派による風景画の歴史的意義等が主に論じられる。

第6章では、前章までの考察の対象であったニューイングランドから、アメリカ南部へと舞台が移される。ここでは、18世紀末から19世紀初頭にかけて、「綿花王国」と呼ばれたアメリカ南東部の「気候、土壌、害虫、肥料そして奴隷制度に基づく資本主義農業の相互関係性」(109)が主に検証される。英国やニューイングランドの機織り機を始めとする技術革新と、南部奴隷制との関係性が中心的テーマだが、当時のイギリス人女性が書いた書簡などをもとに、人々が奴隷制度と南部自然の豊かさをどう捉えていたのかを描出する文化史的記述を含める一方で、メキシコワタミゾウムシという綿花につく「害虫」が南部経済にいかなる打撃を与えたのかという、生態学史的な考察も併せて展開されている点が特徴的である。

第7章以降は、アメリカ南部からさらにアメリカ西部史へと視点が移される。第7章の主要テーマは、19世紀半ばのカリフォルニアで始まったゴールドラッシュである。ここ

---

<sup>3)</sup> 本書で特に参照されているのが、Carolyn Merchant, *Major Problems in American Environmental History: Documents and Essays* (Lexington, MA: D.C.Heath, 1993)、並びに、Merchant, *American Environmental History: An Introduction* (New York: Columbia UP, 2007)である。

で注目されるのが、文字通り世界中から人を集めたゴールドラッシュにより形成された、北米先住民や黒人を含むアメリカ人、カナダ人、ヨーロッパ人、アジア人、ラテンアメリカ人といった、多人種多民族集団により形成された多文化的関係である。そこに、金鉱採掘場の劣悪な環境や煤煙、汚水などが生態系に及ぼした影響についての記述が続く。とりわけ本章後半において、金採掘の負の遺産として、カシの木の大量伐採や、灰色グマなどの多くの野生動物がシエラ山脈周辺で消滅したこと、またサケを含む多くの魚が急激に減少した結果、「ある程度までは回復可能だが、先住民だけが住んでいた頃の生態系にもどすことはできない」(139) ほどに自然破壊が進行した点が述べられる。こうした記述の背景には、従来の歴史記述におけるゴールドラッシュの進歩的理解、すなわち、「フォーティナイナーズが大地から金銀を採掘し、農民が牛を放牧し小麦を育て、富を蓄積し、フロンティアで培われた独立独歩の人間の勝利」をもたらした、というような、単線的歴史記述への強い反省がある。

続く第8章で描かれるのは、西部開拓の舞台である「大平原」をめぐる歴史物語である。従来の歴史記述において、特にフレデリック・ジャクソン・ターナーをはじめとする伝統的西部史家たちは、過酷な自然と先住民の脅威を科学技術の力で克服する「勝利の物語」(143) を描き続けてきた。それに対して「環境史的」西部史は、自然環境を、人間の行為を単に受け入れるだけの客体として描くのではなく、むしろ歴史的主体として重要な役割を果たす一要素として捉え直す。それにより「単なる環境保護の思想や運動といった歴史叙述を越えて、新しい歴史解釈の基盤となる」(143-144) 歴史観の生成が期待されるのである。

こうした前提に基づき、本章の中心的主体として登場するのが、先住民やヨーロッパ植民者ではなく、大平原を長期にわたり支配してきた動物、バッファローである。そのバッファローを中心に、大平原における先住民の伝統的生活様式や文化が構築されてきたわけだが、16世紀以降ヨーロッパ人により南米経由で馬が持ち込まれたことで、大平原の生態系や経済に大きな変化が生じる。遊牧型に生活様式を変化させた先住民部族が現れ、また馬の利用により効率的なバッファロー狩りが可能になり、それにより先住民の生活は、干ばつや疫病によるバッファローの増減により強く影響されるようになる。さらに、富と名声の象徴として先住民社会の中で馬が機能しはじめると、馬の数を基準とする社会的差異が形成されていく。一方、18世紀末から19世紀初頭にかけて先住民部族の間で大流行し、大平原全体で約1万7000人を死なせた天然痘は、馬を使いヨーロッパ系アメリカ人と広く交易する部族の中で拡散した。こうして1870年までに大平原からバッファローが消えると同時に、バッファローに依存する先住民文化も消え去ったのである。

こうした流れを受けて、第8章後半でまとめられるのが「生態系に優しい」先住民というイメージをめぐる議論である。すなわち、土地開発者としてのヨーロッパ人との対比の中で、土地と調和する伝統的自然保護論者として先住民を描き出すような歴史記述は、これまで様々な議論を呼んできた。その一方で、先住民が実際には自然環境とどのような関係を持ち、ヨーロッパ系アメリカ人の植民地化によりいかなる影響を受けたのかという議論も活性化されている。さらに著者は、環境史家ウィリアム・クロノンの主張をもとに、これまでの「大平原」の歴史が、白人開拓者を中心とする進歩の物語として描かれてきた点を批判し、今後は、従来の歴史物語から排除されてきた、先住民やバッファロー、黒人

カウボーイや自営農民、女性開拓者、中国人、メキシコ人らについての多様な「物語」を含めることが、新しい西部史の課題であると述べている。(160, 164)

そして第9章から、時代は20世紀に入る。本章で取り上げられるのは、資源の効率的な管理を目指す「保全 (conservation)」と、自然それ自体の「保護 (preservation)」を求める主張との対立が、近代的自然保護思想と国立公園制度の形成を通じて描かれる。注目すべきは、これらの思想や制度が、「あたかも普遍的な価値を有するかのようによて考えられてきた」ことへの、著者からの明確な批判の提示であろう。著者は、20世紀初頭という「特定の時代と国家に台頭した価値や運動が時空を超越する、となぜ考えなければならないのだろうか」との疑問を呈し、人の手が入っていない特別な自然としての意味を付与された「原生自然」は、人間の思考による構築物であり、自然を蝕む「病原菌」としての人間文明というイメージの形成こそが、ウィルダネスを「人間が作り出した問題を解決する糸口」であるかのように見せかけていると主張する。その意味でウィルダネスとは、人間が見出した解決策ではなく、人間が作り出した問題そのものであると捉え直すことができるのである。(179)

続く第10～12章では、地域毎に移行してきたこれまでの歴史記述とは多少異なる切り口が示される。第10章では、19世紀後半の都市化と産業化に伴う生活環境の変化、とりわけ、東部や中西部の大都市における大気汚染、廃棄物、騒音、水質汚染などの問題、あるいはそれに伴う都市住民の健康被害について、工学者、市民、政治家らがどのように対応したのかが検証されている。第11章の主題は、これまでの流れと若干切り離された形で、「生態学」なる学問の形成とその展開がまとめられる。ただし本章の内容は、1892年に科学者エレン・スワローが「エコロジー」という言葉をアメリカで初めて紹介して以来の、北米における生態学の発展史を述べるにとどまらない。すなわち、スワローに続く、生物学者フレデリック・クレメンツ、生態学者アーサー・タンズレー、ロバート・M・メイ、アルド・レオポルドといった人物が提唱した、生態学の概念において用いられる「有機」「機械」「カオス」などのメタファーが、人間の自然に関する態度や倫理観に与えた影響、ひいては、環境史の専門家や環境政策の立案者に及ぼした影響についての考察が展開される点に、本章の内容の独自性がある。

そして「環境主義の時代へ」と題された第12章では、1970年代以降の、いわゆる「環境の時代」において、政策や法制度、市民運動などにより経済開発が規制され、原生自然を保護する動きが顕著になるまでの経緯が述べられている。20世紀初頭、近代的自然保護の思想が生まれたセオドア・ローズベルトの時代から、第2次世界大戦を経て、殺虫剤の規制や絶滅危機種の保護など多くの環境関連法案が提出されたケネディ政権時代、環境アセスメントが整備されたニクソン政権時代、カーター政権時のオイルショックに、レーガン政権における規制緩和といった、政権ごとの環境保護関連政策の変化、発展が述べられる。最後に終章では、環境史の今日性という観点から、「環境正義」「環境人種主義」といった、多文化主義と環境問題が交錯する領域を取り扱う新たな方法論、もしくは概念が紹介されている。

このように、ここまで各章の内容や構成をかなり子細にまとめてきたが、それは前述のように本書の特徴が、異なる学問分野、あるいはディシプリン間で分断されていた研究成果や情報をあえて交錯させる中で、複合的・多角的な視点に基づく新しい歴史記述の形式

を模索しようとする著者の態度、あるいは記述の構成自体にあると考えるためである。

こうした「新しい」歴史記述を模索する態度に加え、本書のもう一つの功績としてあげられるのが、時代毎に展開される出来事の間には存在する、歴史的連続性への意識的注目である。例えば従来の環境史研究の多くは、19世紀末から20世紀初頭にかけての近代的自然保護の概念が確立された時代と、1970年代のいわゆる「環境の時代」以後の展開に、記述の焦点が偏る傾向にあった。しかし本書は、例えば1970年代以降の環境運動の展開が、20世紀前半からの歴史的潮流の延長線上に捉えられるなど、従来の歴史記述が埋めきれなかった空白や連続性を意識的に補完することを目指している。

一方、本書の課題点をあげるとするならば、上記のような、歴史記述の包括性と連続性を重視するあまり、歴史を語る上での「物語」の軸や力点のようなものがより認識しづらくなった点であろうか。従来とは異なる歴史記述の選択により、どういった意味での新たな視点が見出され、またそうした新しい視点の構築が何を意味するのか、その学問上の意義や目的とは何か、といった点が、多様な対象の選択や方法論が紹介される中で拡散し、曖昧になっているように感じられる。これについては著者自身も、「包括的な歴史観を目指す環境史研究は非常に難しい課題を抱え」(253) ていると認めているが、本書をはじめ、環境史の包括的歴史観の追求がしばしば陥りがちなジレンマが、本書における、幅広い時代や対象、方法論への目配りの良さと、極端なまでの記述の中立性とバランスの良さに、図らずも表れているのかも知れない。

ただし、こうした課題は今後の環境史研究全般の積み重ねの中で徐々に解決されるべき問題であり、本書の存在意義を決定的に損なうものではないであろう。そして、現代の環境史が抱えるもう一つの課題、すなわち、「人間が人間のために叙述する歴史物語が、忠実に自然の「声」を描き出せるか」(253) という問題に、著者が今後どのような歴史記述によって応えていくのかという点に、大いに興味が湧いてくる。その意味で本書は、今後の環境史研究の無限の広がりや予感させる、非常にスケールの大きな序章として捉えることも可能なのである。